

★ ☆ ★れんれんのオリジナル古典文法★ ☆ ★

～古文が苦手なあなたへ贈るれんれんからの最高のプレゼント～

～古文の優雅な世界へようこそ～

この「れんれんのオリジナル古典文法」を手にしたことになったみなさんへ。

みなさんは古文についてどのように思っているのでしょうか。現代語とは似ても似つかない、外国語のように難しいものだと思うのではないのでしょうか。

結論から言うと、古文は現代文等の試験よりかなり優しいです。それに、ちよつと読み方を工夫するだけでさらに格段と理解しやすくなり、点数は一気に変わってきます。

私はガチガチの理系で3年生の初めてのマーク模試では古文は7点、記述模試では0点からのスタートでした。そんな理系人間の私でも古文が出来るようになり、得意科目になった。そのときに得た知識や技術を全身全霊をこめてみなさんに伝授します。センター試験の古文で満点を取るということを夢見るだけでなく、実際にその夢を叶えましょう。そして二次試験でも古文が必要という方は最後までお付き合いください。

★点数を上げるための基礎固め★

① 古文単語（理系は400語程度、文系600語程度）

② 文法

③ 古文常識

❖①は読解演習をする際に適宜確認はしていきますが、普段から各自行ってください。

❖②③においては、授業で行うため、復習をして理解してください。

❖その他の読解の技術的なことは文章読解において説明していくためこれも復習をし、身に着けてください。

古文が苦手でも「古文を楽しむ」という気持ちは捨てないでください。その気持ちさえあれば確実に古文の成績は伸びてくるはずです。

とにかくに道ある君の御世ならば事しげくとも誰かまどはむ

☆動詞

動詞の活用表

活用の種類	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
四段活用	a	i	u	u	e	e
上一段活用	i	i	いる	いる	いれ	いよ
上二段活用	i	i	u	うる	うれ	いよ
下一段活用	け	け	ける	ける	けれ	けよ
下二段活用	e	e	u	うる	うれ	eよ
カ行変格活用	こ	き	く	くる	くれ	こ・こよ
サ行変格活用	せ	し	す	する	すれ	せよ
ナ行変格活用	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね
ラ行変格活用	ら	り	り	る	れ	れ

✿暗記すべき動詞

上二段活用・・・着る・似る・干る・居る・射る・鑄る・率る・煮る・見る・試みる・用ゐる・率ゐる

下一段活用・・・蹴る

カ行変格活用・・・来

サ行変格活用・・・す・おはす

ナ行変格活用・・・死ぬ・往ぬ（Ⅱ去る）

ラ行変格活用・・・あり・をり・はべり・いまそかり

ア行動詞・・・得・心得

ワ行動詞・・・植う・飢う・据う

✿活用の種類の判別は、「V_ナず（ない）」でVの活用語尾で判別。

※ただし、その際語句に可能の意味をもたせてはならない。

☆形容詞・形容動詞

活用の種類	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
ク活用	から く	かり く	し	かる き	けれ	かれ
シク活用	しから しく	しかり しく	し	しかる しき	しけれ	しかれ

※活用の種類の判定は「形容詞となる(て)」で、活用語尾を見て判別。

✿左の活用(カリ活用)は、助動詞と接続するための補助活用である。

✿未然形は仮定条件のときのみ使用。

活用の種類	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
ナリ活用	なら	なり に	なり	なる	なれ	なれ
タリ活用	たら	たり と	たり	たる	たれ	たれ

✿名詞十なり(たり)との判別がつきにくい場合は、頭に「いと」をつけて意味が通るかで判別。

☆形容詞・形容動詞の語幹用法

①原因理由・・・「名詞＋（を）＋形容詞の語幹＋み」・・・（名詞が形容詞なので。）

春の野に／すみれ摘みにと／来し我そ／野をなつかしみ／一夜寝にける

しのぶ草／見るに心は／なぐさまで／忘れがたみに／漏る涙かな

逢ふことも／涙に浮かぶ／我が身には／死なぬ薬も／何にかはせむ

②感動表現・・・「あな（あら）＋形容詞の語幹」・・・（ああ形容詞だな。）

虎とのみ／もてなされしは／むかしにて／いまはねずみの／あな憂世の中

③連体修飾格・・・「形容詞の語幹＋の＋体言」・・・（形容詞の体言だなあ。）

めでたの様や

✿シク活用の際は、終止形を語幹として使う。

✿「み」は接尾語で他に

①名詞を作る

夕されば／藤の繁みに／はるばろに鳴く／ほととぎす

②並列を作る

神無月／降りみ降らずみ／定めなき／時雨ぞ冬の／始めなりける

☆助動詞

未然形接続・・・る・らる・す・さす・しむ・む・むず・まし・じ・ず・まほし

る・らる

- ① 受身・・・(～される)
- ② 尊敬・・・(～なさる)
- ③ 自発・・・(自然と～される・思わず～してしまう)
- ④ 可能・・・(～できる)

	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
る	れ	れ	る	るる	るれ	れよ
らる	られ	られ	らる	らるる	らるれ	られよ

❖ 上に心情を表す語があるときは「自発」になりやすい。

❖ 下に打消があるときは「可能」になりやすい。

❖ 無生物主語に「受身」はとらないのが原則。

❖ 下に尊敬表現が来る場合は「尊敬」にならない。(～れ給ふ)

❖ 「自発」と「可能」には命令形は存在しない。

❖ 四段・ナ変・ラ変には「る」が接続し、それ以外には「らる」が接続する。

す・さす・しむ

- ① 使役・・・(～させる)
- ② 尊敬・・・(～なさる)

	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
す	せ	せ	す	する	すれ	せよ
さす	させ	させ	さす	さする	さすれ	させよ
しむ	しめ	しめ	しむ	しむる	しむれ	しめよ

敬語が伴わないものは「使役」。

最高敬語がふさわしくないものは「使役」。

本人がしそうにない行為は「使役」。

軍記物語ではたまに「受身」がある。武士の心意気（させてやったの）転。

四段・ナ変・ラ変には「す」が接続し、それ以外には「さす」が接続する。

む・むず

全てア段音

①（可能）推量・・・（～できる～だろう）

②意志・・・（～よう）

③勧誘・適当・・・（～しないか・～のがよい）

④假定・婉曲・・・（～としたら・～ような）・・・文中にくる

文末にくる

		未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
む	○	○	○	む	む	め	○
むず	○	○	むず	むずる	むずれ		○

下に「体言の省略された助詞・読点・体言」がくる場合は「假定・婉曲」。

「意志・適当・勧誘」は訳で決める。

反語表現は「可能推量」となる。

「てむや・なむや」の形は「～してくれないか・～できようか」と解釈されやすい。

「～てありなむ・～でありなむ・～ともありなむ・～こそめ」は、「適当」になりやすい。

「むず」は「む」の強調（「む」＋格助詞「と」＋サ変動詞「す」）で、会話文や軍記物語で用いられやすく、意味はほぼ「推量」か、「意志」になりやすい。

一人称「意志」、二人称「適当・勧誘」、三人称「推量」。

まし

①反実仮想・・・（～だったら…だろうに）

②ためらいの意志・・・（～しようかしら）

③実現不可能な希望・・・（～だったらよかったのに）

まし		未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
	まし		○	まし	まし	ましか	○

❖①は「(ば・せば・ましかば・ませば) : まし」の形か、仮定条件省略の形。

❖反実仮想は「後悔・残念・願望」を表現するため和歌に多く用いられる。

❖②は疑問表現 (疑問詞や係助詞) を伴う。

❖③はめったにない。

❖単なる「推量」「意志」の訳もあるが、あんまり出ない。

じ・ず

じ・・・①打消推量 (くないだろう・まい)

②打消意志 (くないつもりだ・まい)

ず・・・①打消 (くない)

	じ		未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
ず		○	ず	ず	ず	ぬ	ね	
		○						○

❖助動詞「む」の打消に相当するのが「じ」である。

❖「じ」の連体形は終助詞「ものを」や接続助詞「を」に接続するときを使う。

❖打消の「ず」は三系統の単語からなる。

❖「ず」の命令形はあまりない (命令にすると禁止表現になるから。)

まほし

①希望・・・(たい)

	未然形
まほし	まほしく まほしから
	連用形
	まほしく まほしかり
	終止形
	まほし
	連体形
	まほしき まほしかる
	已然形
	まほしけれ
	命令形
	○

連用形接続・・・き・けり・つ・ぬ・たり・けむ・たし

き・けり

き・・・①（直接）過去・・・（ゝた）



けり・・・①（間接）過去・・・（ゝた（そうだ）

②詠嘆・・・（ゝたのだなあ・ゝだよ）

	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
き	せ	○	き	し	しか	○
けり	(けら)	○	けり	ける	けれ	○

✿ 「けり」が詠嘆として使われる場合

- ① 目前の事実について用いられている。
② 自分の意見について用いられている。
③ 和歌で用いられている。
- つまり主観文で「」内のとき

つ・ぬ・たり

つ・ぬ・・・①完了・・・（ゝた）

②強意・・・（きつとゝゝてしまう）

③並列・・・（ゝたりゝたり）

①完了・・・（ゝた）

②存続・・・（ゝている）

たり	ぬ	つ	
たら	な	て	未然形
たり	に	て	連用形
たり	ぬ	つ	終止形
たる	ぬる	つる	連体形
たれ	ぬれ	つれ	已然形
(たれ)	ね	てよ	命令形

✿ 下に推量の助動詞が来るときは「強意」の訳になりやすい(確述用法)。

✿ 下の過去の助動詞が来るときは「完了」。(ゝにき・ゝてき・ゝにたり・ゝにけり・ゝてけり)

✿ 「たり」は基本的に「**存続**」の意味のほうが強い。

けむ

- ① 過去推量・・・(ゝただろう)
- ② 過去の原因推量・・・(ゝたからだろう・ゝたのだろう)
- ③ 過去の婉曲・・・(ゝたような)
- ④ 過去の伝聞・・・(ゝたという)

けむ	
○	未然形
○	連用形
けむ	終止形
けむ	連体形
けめ	已然形
○	命令形

たし

① 願望(ゝたい・ゝてほしい)

たし	
たく たから	未然形
たく たかり	連用形
たし	終止形
たき たかる	連体形
たけれ	已然形
○	命令形

終止形接続・・・らむ・めり・らし・べし・まじ・なり

らむ

- ① 現在推量・・・(今頃～ているだろう)
- ② 現在の原因推量・・・(～ているからだろう・～ているのだろう)
- ③ 現在の婉曲・・・(～ているような)
- ④ 現在の伝聞・・・(～ているという)

らむ	
○	
○	
らむ	
らむ	
らめ	
○	

めり・らし

- めり・・・
 - ① 推定(～のようだ・～のようにみえる)↑主観
 - ② 婉曲(～のようだ)↑客観的事実だが断定を避ける。
- らし・・・
 - ① 推定(～らしい)↑根拠を持って

		未然形
めり	○	
	○	連用形
らし		
	らし	終止形
	めり	
	める	連体形
	らし	
	めれ	已然形
	らし	
	○	命令形
○		

- ❖ 「めり」＝視覚による推定」「なり」＝聴覚による推定」「らし」＝確信的な推定」
- ❖ 「らし」の推定には根拠が示される。

べし

- ① 推量・・・(～だろう)・・・一人称もしくは疑問・反語・仮定とセット
- ② 意志・・・(～しよう)・・・二人称
- ③ 当然・・・(当然～のはずだ)
- ④ 命令・勧誘・・・(～せよ・～しないか)・・・会話文中
- ⑤ 適当・・・(～のがよい)・・・選択肢がある
- ⑥ 予想・予定・・・(～しそうだ・～することになっている)
- ⑦ 可能・・・(～できる)・・・打消を伴って

べし	未然形
べから べく	連用形
べかり べく	終止形
べかる べき	連体形
べけれ	已然形
○	命令形

❖ 「べきだ」と訳せるのは、「**適當・命令・当然**」のみ。

まじ

- ① 打消推量・・・（～ないだろう・～まい）
- ② 打消意志・・・（～ないつもりだ・～まい）
- ③ 打消当然・・・（～のはずがない・～ないにちがいない）
- ④ 不適當・禁止・・・（～ないのがよい・～てはいけない）
- ⑤ 不可能・・・（～できそうもない）

まじ	
まじく まじから	未然形
まじく まじかり	連用形
まじ	終止形
まじき まじかる	連体形
まじけれ	已然形
○	命令形

❖ 「まじ」は「べし」の打消形。

なり

- ① 伝聞・・・（～そうだ・～らしい・～と聞いている）
- ② 推定・・・（～ようだ・～らしい・～の音が聞こえる）

なり	
○	未然形
なり	連用形
なり	終止形
なる	連体形
なれ	已然形
○	命令形

- ❖ 場面に音声関係している場合は、「伝聞・推定」。
- ❖ 断定せずに人の話や言い伝えで推測している場合は「伝聞」。
- ❖ 撥音便・もしくは撥音便無表記の下にきたら「伝聞・推定」。

体言・連体形接続・・・なり・たり・ごとし

なり・たり

なり・・・

①断定・・・（～である・～だ）

②所在・存在・・・（～にいる・～にある）

たり・・・

①断定（～である・～だ）

	なり		未然形		たり		未然形
	なり	なら	連用形	なりに	たり	と	連用形
	なり	なり	終止形	なり	たり	たり	終止形
	なる	なる	連体形	なれ	たれ	たれ	連体形
	なれ	なれ	已然形	（なれ）	（たれ）	（たれ）	已然形
			命令形				命令形

❖ 「に」の下に存在を表す語が来るときは「断定」。

❖ 「たり」は、めったに出ない。主に和漢混交文で使われる。

ごとし・やうなり

ごとし・・・

①比況（比喻・類似）・・・（～ようだ）

②例示・・・（～のような・～など）

やうなり・・・

①比況・・・（～ようだ）

②例示・・・（～のような・～など）

③婉曲・・・（～のようだ）

	（ごとし）		未然形		やうなり		未然形
	（いふ）	いふ	連用形	いふ	やうなり	やうに	連用形
	（いふ）	いふ	終止形	いふ	やうなる	やうなれ	終止形
	（いふ）	いふ	連体形	（いふ）	（いふ）	（いふ）	連体形
	（いふ）	（いふ）	已然形	（いふ）	（いふ）	（いふ）	已然形
	（いふ）	（いふ）	命令形	（いふ）	（いふ）	（いふ）	命令形

❖ 「やうなり」はめったに出てこない。

❖ 「やうなり」は「名詞(様)」に断定の助動詞(なり)がくつつきできたもの。

❖ 中古において「ごとし」は漢文訓読文(書き下し文)で用いられるようになり、「やうなり」は和文(古文)で用いられるようになった。

特殊型・・・り

り

①完了・・・(ゝた)
②存続・・・(ゝている)

		未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
り	ら	り	り	る	れ	れ	

❖ 「り」の上は必ずe段音が接続する。

❖ 「り」の訳は基本は「存続」がメイン。

★お疲れ様でした。ひとまず助動詞はここまでで終わりです。

助動詞はその接続と活用と意味をしっかりと覚えることが大切です。文章を正しく理解するためにも助動詞を覚えることは必要不可欠なことです。このプリントでは普段学校では教わらない+2の知識を多く入れてあるため、非常におもたい内容となっていますが、これらは後々助動詞判定問題などで必ず役に立ちます。ここまで詳しく勉強してる受験生はほとんどいません。自分の古文の力に自信を持とう！

☆和歌の解釈

和歌とは、表で自然景物を詠み、裏で人事(心情)を詠む自己表白表現である。主に受験界では五・七・五・七・七の三十一文字で構成される物が基本で字数に制限があるために和歌の作者の心情が短い文に凝縮されて、なかなか読み解きにくい文章中ではかなり大事な箇所となるため、しっかりと慣れておく必要がある。

☆解釈の仕方

①まずは五・七・五・七・七に区切り、句切れ(「。」)がつけられる箇所を探す。

☆その際、係り結びや、命令形、終止形、終助詞などを探すと良い

②大雑把な「品詞分解」及び「構造」などを確認。

③②に沿った丁寧な直訳をする。

④掛詞の吟味

☆③で意味の通りにくかったところなどを重点的に攻めてみる。

⑤自然景物と人事を読み替えてみる。またその逆も。

☆よく「花鳥風月」を人事に重ねられやすい。

また、解釈をするためには、和歌の修辞法を学ぶ必要がある。次項からは、和歌の修辞法を行っていくのでしっかりと理解すること。理系の生徒でも「和歌」は、センター試験においても必ず出てくる必須項目である。2011年本試に和歌が登場しなかったのは、例外中の例外である。今後このようなことはめったにないと予想できるので、ないがしろにしないこと。また、文系の生徒においては二次試験においても出てくるので言うまでもなく。

実は、先生はガチガチな理系人間で元々古文が苦手でした。その原因の一つは和歌でした。(笑)

それでは古文の醍醐味、和歌について始めていきましょう。

☆和歌の修辭法

枕詞・・・ある特定の語を導くために使う慣用的な前置きになる語。

❖ 五音が中心であるが、たまに三音のときもある。

❖ 原則訳出しないが、掛詞になっていたり、解釈しなければ意味が通じないときは訳出をする。

(例) 枕詞がその掛かる語の意味で使われた例がある。

たちねは／かかれとてしも／ぬばたまの／我が黒髪を／撫でずやありけむ

❖ 主な枕詞

❑ 茜さす・・・(日・昼・紫)	❑ 秋津島・敷島の・・・(大和)
❑ 足引きの・・・(山)	❑ 梓弓・・・(射る・張る・引く)
❑ 天離る・・・(鄙)	❑ 新玉の・・・(年・月・日・春)
❑ 青丹よし・・・(奈良)	❑ 石走る・・・(滝)
❑ 空蟬の・・・(空・命)	❑ 唐衣・・・(着る・裁つ)
❑ 草枕・・・(旅)	❑ 魂極る・・・(命・夜)
❑ 白妙の・・・(衣・袖)	❑ 垂乳根の・・・(母・親)
❑ 玉鉾の・・・(道)	❑ 飛ぶ鳥の・・・(あすか)
❑ 千早振る・・・(神)	❑ 水茎の・・・(岡・水城)
❑ 射干玉の・烏羽玉の・・・(黒・夜・髪)	❑ 八雲立つ・・・(出雲)
❑ 久方の・・・(天・空・光・月)	❑ 百敷の・・・(大宮)
❑ 物部の・武士の・・・(八十・宇治川)	❑ 朝露の・・・(消え・置く・命)

ひさかたの／光のどけき／春の日に／しづごろなく／花の散るらむ
ちはやぶる／神の井垣に／あらねども／波の上にも／とりゐたちけり

❖ 似た言葉に「歌枕」と言うものがあるが、これは和歌に詠み込まれた名所・地名で
あるため修辭法ではないので混同しないように。

序詞・・・ある言葉を導くための七音節以上の修辭句。前フリ、導入文。

出る順

☆意味の共通性(比喩)

あしひきの／山鳥の尾の／しだり尾の／長々し夜を／ひとりかも寝む

(山鳥の尾の長く垂れ下がった尾のように長い長い夜を一人寂しく寝るのだろうか。)

❖これは恋の歌で、付き合っている相手が夜に訪ねて来ない寂しい女心を詠んだ歌である。

☆同音反復

みかの原／わきて流るる／いづみ川／いつ見きとてか／恋しかるらむ

(みかの原に湧き出して、その原を分けて流れるいづみ川、その「いつみ」のように、あなたにいつ会ったからといってこんなにも恋しいのだろうか。)

❖これも恋の始まりの歌で、恋焦がれる気持ちを表現し詠んだ歌。

☆掛詞によるもの

風吹けば／沖つ白波／立田山／夜半にや君が／ひとり越ゆらむ

(風が吹くと沖の白波が立つという、その立つではないが、あなたは夜中に一人で立つ田山を越えているのだろうか。)

❖これも恋の歌で、別の女の元に尋ねていくようになった夫を妻が心配して口ずさみ詠んだ歌である。

❖序詞は作者の創作なので見抜くのが困難。

❖作者の個性なので、原則訳出！ただし、あくまでも前フリなのでその後の導かれている語に心情の中心を持つてくる。

❖また、序詞は倒置法とは共存しない。序詞は、情景と心情をうまく結びつける接着剤のようなものであり、「情景＋序詞＋心情」の形はこの状態でそのまま維持される。

(例)

露けさを／思ひおくらむ／人もがな／野路の篠原／偲ぶ都に

not 序詞

掛詞・・・心情と景物(土地・地名)などを、同音であることを利用して、一つの言葉に二つ以上の意味を持た

せるもの。それにより、限られた字数の中で文の内容を豊かにするので、訳す際には二度以上訳

出する必要がある。掛詞は原則、歌意に関係があるものどうしを掛ける。

❖ 継起式掛詞・・・上の語を受け下に続くもの

白雪の／まだふるさとの／春日野に／いざうち払ひ／若菜摘みてむ

(白雪がまだ降る故郷の春日野で衣に降った雪を払いながら若菜を摘もう。)

❖ 同時式掛詞・・・上の複数の語句を同時に受けるもの

山里は／冬ぞさびしき／まさりける／人目も草も／かれぬと思へば

(山里はいつそう冬の寂しさがまさって感じられるなあ。人の訪れもなくなり、草も枯れてしまうことを思うと。)

よく掛けられる掛詞

□おもひ(思ひ・火・恋ひ) □おき(沖・置き・隠岐・起き)

□かる(離る・刈る・枯る) □きく(聞く・菊)

□あかし(明石・明かし) □すみ(住み・澄み)

□あき(秋・飽き) □はる(張る・春)

□うき(浮き・憂き) □ふみ(文・踏み)

□あふみ(近江・逢ふ身) □まつ(松・待つ)

□ながめ(眺め・長雨) □ふる(降る・振る・旧る・古る・経る)

□いく(行く・生く) □よ(夜・世・節)

□あふさか(逢う坂・大阪)

❖ などなどこれ以外にもたくさんあります。まずはこの頻出の掛詞を覚えておく。

❖ 右以外の掛詞の見つけ方のコツはやみくもに同音異義語を探すより、本文に書いてある単語、情景を注意して読み込み、掛詞のヒントに気づくしかない。

縁語・・・ある言葉と意味上の縁のある語を意識的に用いて、連想をさせて面白さを出すもの。

✿見つけ方

- ①まずは五・七・五・七・七に区切り、次に単語に区切る。
- ②その中から助詞・助動詞を消す。
- ③縁語の分類を使い、吟味してみよう。

✿縁語の分類

- ①文や歌の全体の意味には関係ない掛詞によるもの。
- ②意味に関係があるが、表現に変化が生じているもの。

※②を認めないという説もある。

難波江の／葦のかりねの／ひとよゆゑ／みをつくしてや／恋わたるべし

（難波江の入江の葦の切り株の一節のような、旅先のはかない仮寝の一夜のかりそめの契りを結んだばかりに、これから先、私はひたすらに身を捧げて恋し続けなければならないのだろうか。）

✿「難波江の葦」は「かりねのひとよ」を導く序詞。「かりねのひとよ」は、「仮寝の一夜と」、「刈り根の一節」の掛詞。「みをつくし」は「身を尽くし」と、「濔標」の掛詞。「難波江」、「濔標」、「わたる」は、縁語。「葦」、「刈り根」、「一節」も縁語。

また、難波江と葦も縁語とする節もある。

✿主な縁語・・・火、糸、衣、気象、水などに関する語に注意。

□衣(着る・張る・萎る・袖・棲・裁つ) □竹(節・節)

□糸(よる・繰る・貫く・ほころぶ) □涙(流る・水)

□露(消ゆ・玉・結ぶ・置く) □袖(裁つ・結ぶ・解く)

□煙り(火・なびく・焦がる) □弓(張る・射る・引く)

隠題(物名)

・・・和歌の意味に関係のない物の名前や題となった語を一首にさりげなく読み込むことで、遊戯的に用いられた。

✿ 掛詞と隠題の違いは、掛詞は二回以上訳出する必要があるが、隠題は、遊びなので訳出する必要はない。

あしひきの／山たちはなれ／ゆく雲の／やどりさだめぬ／世にこそありけれ

(山から離れてゆく雲のように、住処の定まらないはかない世の中であるなあ。)

✿ 「たちはなれ」は「たち離れ」で、ここに「橋」が読み込まれている。また、この歌は序詞を含んでいる。

✿ 折句・・・和歌の各句の初めに物名などを一つずつ読み込んだもの。

唐衣／着つつなれにし／つましあれば／はるばるきぬる／旅をしぞ思う

(何度も着て、着慣れて体に馴染んだ服のように慣れ親しんだ妻を京に置いてきているので、はるばる遠く離れてしまった旅の寂しさをつくづく思うことであるよ。)

✿ 各句の頭の一字を取ってくると、「かきつばた」が折り込まれている。

また他に、「唐衣」は「着」を導く枕詞。「唐衣着つつ」は「なれ」を導く序詞。「なれ」は「慣れ」と「馴れ」、「つま」は「妻」と「棲」、「はるばる」は「遙々」と「張る張る」、「き」は「着」と「来」の掛詞。「なれ」「棲」「張る」「着」は「衣」の縁語。

✿ 沓冠・・・和歌の各句の初めと最後に物名などを一つずつ読み込んだもの。

夜も涼し／ねぎめのかりほ／たまくらも／ま袖も秋に／へだてなきかぜ

✿ これは「米給へ、錢も欲し」が読み込まれている。

本歌取り・・・有名な古歌の一部を自作に取り入れ、古歌の世界を基盤として、新しい世界を創造すること

より、自分の和歌に本歌の奥行きを与え表現効果の重層化を図るもの。

〈本歌〉

苦しくも／降り来る雨か／三輪の崎／佐野のわたりに／家もあらなくに

(なんともひどく降ってくる雨であらうか。三輪の崎の佐野の辺りに家はないのに)

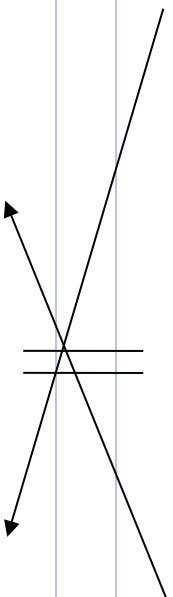
〈本歌取りの歌〉

駒とめて／袖うちはらふ／影もなし／佐野のわたりの／雪の夕暮れ

(馬をとめて袖の雪をうちはらう木陰もない。佐野の辺りの雪の夕暮れよ)

☆比較しよう☆

① 苦しくも／降り来る雨か／三輪の崎／佐野のわたりに／家もあらなくに



② 駒とめて／袖うちはらふ／影もなし／佐野のわたりの／雪の夕暮れ

❖ ①では「雨」が②では「雪」に変わり、①では「家」が②で「影」に変わる。また、それに②の「夕暮れ」が加わる。そう、①では無色透明で暗くしんどいイメージを与えていたのに対し②ではそれに色が加わったのです。つまり、①は旅の苦労をテーマにしていたのに対し、②は、色が加わるにより絵画的で鮮烈なイメージを与え、旅の途中の「雪の夕暮れ」の絵画的優雅な情趣をテーマにしたものに変えたのだ。

☆引歌☆

似たものに引歌と言うものがある。これは働きのにも本歌取りと同じであるが、これは、散文や主に物語などで文章中に和歌の一部が引つ張られて出てくるものだ。これは元の歌を基盤とし、引歌の表現や内容を前提にして、文脈に暗示的に装飾や意味を付け加え、表現効果を挙げるものである。

体言止め・・・和歌の終わりを体言で終わること。

❖ 和歌で用いられる場合は主に「余情」や「詠嘆」の気持ちを表現する。

❖ 文章中の場合は簡潔性を求めるためにあえて述語を省略することがあり、結果的に体言止めになる場合がある。

(例)春はあけぼの。やうやうゝ

これやこの／行くも帰るも／別れては／知るも知らぬも／あふ坂の関

(これがまあ、東国に行く人も都に帰ってくる人も、人ごとに別れ、知っている人も知らない人も別れたり出会ったりするという逢坂の関なのだなあ。)

❖ 「行く」と「帰る」、「知る」と「知らぬ」は対句。「あふ坂」は「逢ふ坂」と「大阪」の掛詞。

和歌は何度も何度も読むことで少しずつ慣れてきます。和歌は苦手とする生徒が多い項目の一つです。ここで差をつけましょう。

ゝ和歌の修辞法はひとまずこれでおしまいです。おつかれさまでした。ゝ

助詞

助詞の種類・・・格助詞・接続助詞・係助詞・副助詞・終助詞

学校の授業では軽く流されがちな助詞ですが、実は問題を解く上ではかなり重要になる助詞もあります。
ここではそんな助詞についての説明を大まかに行っていきます。

係助詞

・・・・いろいろな語について、強意や疑問、反語の意味をつけ加えたりするもの。また、その文末（述語）に一定の影響を与える（係り結びの法則）。

☆係助詞の種類・・・ぞ・なむ・や・か・こそ・は・も

係助詞	意味	結びの句
ぞ	強意	連体形
なむ	強意	連体形
や	疑問 反語	連体形
か	疑問 反語	連体形
こそ	強意	已然形
は	他と区別	終止形
も	添加 強意	終止形

☆「ぞ・こそ・なむ」の強意の程度は「こそ」が一番強く、次に「ぞ」、一番弱い「なむ」。そのため現在でも「こそ」だけが残ったのだ。そのため、「こそ」においては訳出する場合もある。

（例）今日こそは早く寝よう。など。

☆「や・かは」はほぼ反語。たまに疑問として使われることがある。

☆「にや・にか」はほぼ疑問。たまに反語として使われることもある。

☆「も」は特に「添加」が重要。頻出です。

☆「もぞ・もこそ」は「～しては困る・～すると大変だ」といった「危惧」の表現であるが、この表現は係り結びの法則が成立しないと召喚できない。

☆「こそ」の結びの句の下が句点（。）ではなく読点（、）で文が続くときは逆接用法となる。

☆「結びの省略」と「結びの流れ」と「係助詞の文末用法」の違い。「結びの省略」は文に簡潔性を求めるために、文末を係助詞で終えるもの。「結びの流れ」は、次の文に続くために接続助詞などに接続ため結びの形が保てなくなること。「係助詞の文末用法」は終助詞とする説もあるが、意味は係助詞と変わらないため気にすることは無い。ただしこの用法が使えるのは「体言・連体形＋ぞ」「体言・連体形＋か」「終止形＋や」の形のみ！それ以外は結びの省略。

☆係り結びの法則は単に意味を付け加えるためだけではなく、読解において役立つ構造を持つ。

係助詞

主部

述部

結びの句。

この構造は常に成り立つため、文が長くなっても的確に主述関係がつかめやすくなる。

係り結びは意外と置くが深いのだ！笑

接続助詞・・・文と文をつなぐ働きのある助詞。接続詞のような働きのあるもの。

✿接続助詞の種類・・・ば・とも・ど・ども・が・に・を・手・して・で・つつ・ながら・ものの・ものを・

ものから・ものゆゑ

接続助詞													意味			接続		
ば													仮定	確定	偶然・恒常	已然形		
とも													逆接仮定		終止形		未然形	
ども													逆接		已然形			
ど													逆接・単純		連体形			
が													順接・逆接		連体形			
に													順接		連用形			
を													順接		連用形			
て													順接		連用形			
して													順接		連用形			
で													打消接続		未然形			
つつ													並行		連用形			
ながら													並行	逆接	体言連用形			
ものの													逆接		連体形			
ものを													逆接		連体形			
ものから													逆接		連体形			
ものゆゑ													逆接		連体形			

格助詞・・・体言・連体形に接続し、その文節が文中でどのような働きをしている

かを示す助詞。

✿格助詞の種類・・・が・の・を・に・へ・と・より・にて・して・から

と						へ	に						を			の					が			格助詞	
並列	強調	比喻	結果	相手	引用	方向	強意	相手	原因	対象・目的	結果	帰着点	場所・時	起点	場所	対象・目的	連体修飾格	連用修飾格	同格	準体言	主語	連体修飾格	準体言	主語	意味

から		して		にて			より							格助詞
経由地	起点	方法	手段	原因・理由	手段	場所	限定	即時	手段・方法	場所	経由	起点	比較	意味

✿読解において特に重要なのは「の」「や」「と」である。

✿それ以外はざっと目を通しておく程度でよい。「あゝ、確かに」みたいな。

副助詞・・・いろいろな語に接続し、その文節に副詞的性質を持たせて、以下の用

言を修飾働きのある助詞。

✿副助詞の種類・・・すら・だに・さへ・のみ・ばかり・まで・など・し(しも)

副助詞	意味	訳	接続
すら	類推	～さえ	体言・連体形・助詞
だに	類推	～さえ	
さへ	最小限の限定 追加	せめて～だけでも ～までも	いろいろな語
のみ	限定 強意	～だけ ×	
ばかり	程度 限定	～くらい ～だけ	
まで	程度 限定・範囲	～くらい ～まで	
など	例示 婉曲 引用	～など ～と	
し	強意	×	

✿「すら」「だに」「さへ」の訳出は特に注意！これを聞く問いはセンター頻出！

✿「し」は過去の助動詞「き」やサ変動詞「す」との区別をはっきりすること。

終助詞・・・いろいろな語に接続し、文末に置くことで意味を付け加え、その文を

終止する。

❖終助詞の種類・・・な・そ・場や・なむ・かし・もが(な)・てしが(な)・にしが(な)・か(な)・かし

終助詞	意味	接続	訳
な	詠嘆・禁	文末・終止形	くだなあ・くするな
そ	禁止	連用形	くするな
ばや	自己願望	未然形	くたい
なむ	他者願望	未然形	くてほしい
もが(な)	状況願望	体言・連用形	くがあればなあ
てしが(な)	自己願望	連用形	くたい
にしが(な)	自己願望	連用形	くたい
か(な)	詠嘆	体言・連体形	くだなあ
かし	念押し	文末	くだよ・くよ

❖「そ」は主に副詞の「な」を伴って「な〜そ」の形で用いられることが多い。

❖願望の意味の違いは明確に区別しよう。

敬語法

～主体判定を手中に～

まずは、敬語の種類を知ろう！

- ① 尊敬語（～なさる。）
② 謙讓語（～し申し上げる。）
③ 丁寧語（～です・～ます）

敬語の種類		誰から	
丁寧語	謙讓語	尊敬語	会話文は会話主。
地の文は作者。			
会話の相手読み手	客体	主体	誰へ

敬意を表す語の種類

（本動詞と補助動詞・助動詞）

- ① 本動詞・・・その動詞が文の述語の中心となる動詞で、かつ敬意を併せ持ったもの。
- ② 補助動詞・・・述語の中心となる用言に付き助動詞的に敬語の意味を付け加える。
- ③ 助動詞・・・「る・らる・す・さす・しむ」のみだがこれらはかなり弱い敬語表現だ。

敬語の強弱関係

古文の世界はバリバリの身分社会で、日本史を履修なさった方はイメージしやすいだろうが、敬語を使われる貴族は、天皇から下級貴族までとピンからキリまでいる。そのため敬語にも強弱があり、使い分ける必要があるのだ。

（例）

強 弱

おはします ～ おはす
おぼしめす ～ おぼす

最高敬語（二重尊敬など）

・・・最高クラスではない一般的な敬語を二つ重ねて最高クラスの敬語と同レベルまで敬意をあげるもの。

（例） おはします ～ おはす・給ふ ～ せ

←

せ給ふ・おはします ～ おはす のような感じ。

絶対敬語・・・初めから敬意の方向が決まっているもの。

奏す（天皇・院） 啓す（中宮・皇太子） に対し「～し申しあげる」

「行幸（天皇） 御幸（上皇・法皇・女院） 行幸（天皇・法皇・上皇・女院）
行啓（太皇太后・皇太后・皇后・皇太子・皇太子妃） のおでかけ」

自尊敬語・・・天皇自身が自らに対して敬語を使うこと。

※また、ときの藤原道長など、その時代において最も権力を握った人なども自尊敬語を使うこともある。

特殊	体言・連体形接続			終止形接続						連用形接続						未然形接続												
り	たり	なり		なり	まじ	べし	らし	めり	らむ	たし	けむ	たり	ぬ	つ	けり	き	まほし	ず	じ	まし	むず	む	しむ	さす	す	らる	る	基本形
ら	たら	なら		○	まじく まじから	べく べから	○	○	○	たく たから	○	たら	な	て	○	せ	まほしく まほしから	ざらず	○	ましか	○	○	しめ	させ	せ	られ	れ	未然形
り	とたり	にり		なり	まじく まじかり	べく べかり	○	めり	○	たく たかり	○	たり	に	て	○	○	まほしく まほしかり	ざりず	○	○	○	○	しめ	させ	せ	られ	れ	連用形
り	たり	なり		なり	まじ	べし	らし	めり	らむ	たし	けむ	たり	ぬ	つ	けり	き	まほし	ず	じ	まし	むず	む	しむ	さす	す	らる	る	終止形
る	たる	なる		なる	まじき まじかる	べき べかる	らし	める	らむ	たき たかる	けむ	たる	ぬる	づる	ける	し	まほしき まほしかる	ざるぬ	じ	まし	むずる	む	しむる	さする	する	らるる	るる	連体形
れ	○	なれ		なれ	まじけれ	べけれ	らし	めれ	らめ	たけれ	けめ	たれ	ぬれ	つれ	けれ	しか	まほしけれ	ざね	じ	ましか	むずれ	め	しむれ	さすれ	すれ	らるれ	るれ	已然形
れ	○	なれ		○	○	○	○	○	○	○	○	たれ	ね	てよ	○	○	○	ざれ	○	○	○	○	しめよ	させよ	せよ	られよ	れよ	命令形
完了(うたふ) 存続(うてゐる)	比喩(たとへ)のきつ(は)	断定(くだ)	断定(くだ) 存在(く)にある(うてゐる)	伝聞(うたひ) 推定(うたふ)ようだ	打消推量(くはないだろう) 打消意志(くまい) 打消当然(くはずがない) 不適當(ふとう)・禁止(く)ないのがよい(うな) 不可能(ふかふ)できない	命令・勧誘(くせよ) 可能(うてゐる)できる	推量(うたふ)だろう 意志(うたふ)よう 当然(うたふ)はずだ 適当(うたふ)がよい 命令・勧誘(くせよ) 可能(うてゐる)できる	推定(うたふ)のうたふだ	推定(うたふ)のうたふだ	現在推量(うたふ)だろう 原因推量(うたふ)からだろう 伝聞・婉曲(うたひ)・婉曲(うたふ)のうたふだ	願望(うたい)	過去推量(うたふ)だろう 過去の原因推量(うたふ)からだろう 過去の伝聞・婉曲(うたひ)・婉曲(うたふ)のうたふだ	存続(うてゐる)	完了(うたふ) 強意(きつ)と	過去(うたふ) 詠嘆(うたふ)だなあ	過去(うたふ)	願望(うたい)	打消(くない)	打消意志(くまい) 打消推量(くはないだろう)	反実(はんじつ)・仮想(かぎょう)なら…だから(うたふ) ためらいの意志(うたふ)しうたふ(うたふ) 不可能(ふかふ)な希望(うたふ)ならいいの(うたふ)	推量(うたふ)だろう 意志(うたふ)よう	推量(うたふ)だろう 意志(うたふ)よう 適當・勧誘(うたふ)がよい 仮定・婉曲(うたふ)なら…のうたふだ	使役(うたふ)させる 尊敬(うたふ)なさる(うたふ)	受身(うたふ)される 尊敬(うたふ)される(うたふ) 自発(うたふ)される 可能(うてゐる)できる	意味			

格助詞																																							
から		して		にて			より						と					へ	に						を			の					が			単語			
経由地	起点	方法	手段	原因・理由	手段	場所	限定	即時	手段・方法	場所	経由	起点	比較	並列	強調	比喩	結果	相手	引用	方向	強意	相手	原因	対象・目的	結果	帰着点	場所・時	起点	場所	対象・目的	連体修飾格	連用修飾格	同格	準体言	主語	連体修飾格	準体言	主語	意味

間投助詞					
を	よ		や	単語	
感動	呼びかけ	詠嘆	詠嘆	意味	
いろいろな語				接続	

係助詞						
も	は	こそ	か	や	なむ	ぞ
添加・強意	他と区別	強意	疑問・反語	疑問・反語	強意	強意
終止形	終止形	已然形	連体形	連体形	連体形	接続

接続助詞														
ものゆゑ	ものから	ものを	ものの	ながら		つつ	で	して	て	を	に	が	ども	ど
逆接				並行	逆接	並行	打消接続	順接		順接・逆接		逆接・単純	逆接	
連体形				体言連用形		連用形	未然形	連用形		連体形		已然形	終止形	未然形
							已然形						偶然・恒常	意味
							已然形						接続	

副助詞											
し	など			まで		ばかり		のみ	さへ	だに	すら
強意	引用	婉曲	例示	程度	限定・範囲	限定	程度	強意	限定	添加	最小限の限定
×	〜と	〜など	〜など	〜くらい	〜まで	〜だけ	〜くらい	×	〜だけ	〜までも	せめて〜だけでも
いろいろな語									体言・連体形・助詞		
											接続

終助詞									
かし	か（な）	にしが（な）	てしが（な）	もが（な）	なむ	ばや	そ	な	単語
念押し	詠嘆	自己願望	自己願望	状況願望	他者願望	自己願望	禁止	詠嘆・禁止	意味
文末	体言・連体形	連用形	連用形	体言・連用形	未然形	未然形	連用形	文末・終止形	接続
〜だよ・〜よ	〜だなあ	〜たい	〜たい	〜があればなあ	〜てほしい	〜たい	〜するな	〜だなあ・〜するな	訳